



境のお茶

佐佐木邦子

広い家に引っ越した知人から、「ススキがきれいなので見に来ませんか」と誘いがあった。一人で暮らしていたお母さんを気遣って、定年を機に実家へ戻ったのだ。実家とはいえ、マンション暮らしが長かった知人にはあらゆる事が新鮮らしくて、虫の音が聞こえなくなった、栗が実った、アケビを見つけた、と折々に電話がある。

晴れた午後に出かけてみた。知人はちょっと近所へ行ったとかで、家にいたのはお母さん一人。すぐ外は庭の続きのような蔵王連峰で、おびたしいススキの穂が風に揺れている。広大な海に、銀色の波が寄せては引いているように見えた。

「すぐに戻るでしょう。まあ、お茶でも」

庭の向こうの風景に見とれていたら、お母さんがきちんと膝をついて、熱いお茶をすすめてくださった。こちらも慌てて正座し直す。「峠の一軒家の山姥みたいな人なの」と知人は言っていたが、だいぶ違う。

「山姥ですよ。町に住んだこともあったのですが、わたしにはやっぱり山が合うようで。枯れたススキの上を風が渡る音というのは、すごいですよ。強い風の夜は、お茶をすすりながら、じっと風の音を聞いています」

豊かな白髪、顔に刻んだシワ、童女のような笑い。もしかしたら山姥というのは、世間のほこりを洗い落とした、清らかな女性をいうのだったろうか。

昔の旅の風景には、きっと峠の茶屋があった。峠のこちら側とあちら側は別の世界で、峠を越えたら何があるかわからない。だから、その境でお茶を飲む。

お茶は境の飲み物である。ウチとソトの境、夜と朝の境、日常と非日常の境。客にお茶を出すのは、ソトの他人がウチへ入ってくるのを認めることだ。初対面のお母さんにお茶を淹れていただいたのは、ススキの群れを一緒に眺めるにふさわしいと、認めてもらった

ようなものか。

今も日本人は日に何度かお茶を飲むが、一番こだわるのが朝茶だ。朝が、ウチからソトへ踏み出す時間だからかもしれない。また、葬式の香典返しにお茶を用いる地方は、全国のあちこちにある。そうかと思えば宮城県の北の方では、結婚式のときお嫁さんがお茶を持参し、お婿さんの家に着いたら舅姑にこのお茶を淹れて出す風習があった。

お茶が二つの世界の狭間だからだ。境に対する礼儀を持っていた暮らし。山はひとつの境である。おびたしいススキの穂に夢心地になりながら、熱いお茶をゆっくり味わった。

2009.10 こもれび第8号